

長野県都市部の看護現場における
英語の必要性に関する研究

平成 11 年度～平成 12 年度 長野県看護大学特別研究補助金
研究成果報告書

平成 13 年 3 月

研究代表者 西垣内磨留美
(長野県看護大学助教授)

研究組織

研究代表者

西垣内磨留美

長野県看護大学 外国語助教授

研究分担者

田中建彦

長野県看護大学 外国語教授

(平成 11 年度)

山田幸宏

長野県看護大学 看護形態機能学教授

太田勝正

長野県看護大学 基礎看護学教授

(平成 12 年度)

研究経費

平成 11 年度 182 千円

平成 12 年度 318 千円

計 500 千円

研究の概要

本研究は以下のような経過で検討された。

平成 11 年度

1 計画の立案と実態調査

- 1) 看護現場における英語の必要性に関する実態把握のための調査研究
- 2) 長野県下全市及び臼田町の総合病院の婦長を対象に質問紙調査を実施
- 3) 質問紙の回収、及びデータの集計

2 中間報告

平成 12 年度

- 1 調査内容の分析検討の実施
- 2 最終研究報告書の作成

目次

はじめに	1
研究組織	2
研究経費	2
研究の概要	3
調査目的	4
方法	4
1. 調査期間	
2. 調査対象者	
3. 調査方法	
4. 調査内容	
結果および考察	7
1. 基本属性	
2. 選択による回答の結果と考察	
3. 自由記述による回答の結果と考察	
結語	12
1. まとめ	
2. 提言	
3. 課題	
資料	18

はじめに

長野県には1999年末現在で4万人の外国人が生活しており、長野県民220万人の2%程度を占めている(朝日新聞、2000)。長野県在住の外国人が病気になり、あるいは傷害を負い、通院や入院をするという事態も当然起こっている。その多くはブラジル国籍、中国国籍、韓国・朝鮮国籍であり、英語を日常語として話している人は比較的少ない。しかし、その場合であっても、病院などの看護現場では英語によるコミュニケーションが行なわれ、それによってかなりの意思疎通が可能となる場合が多い。英語は国際語と考えられ、英語を母国語としない外国人の中でも英語を修得する者も増えてきている。看護現場で、主なコミュニケーションの手段として考えられるのはやはり英語である。本研究は、長野県の看護現場では、どのような英語が必要とされ、また、ナースはどの程度英語を活用して看護業務を行っているか等、看護現場での英語の必要性の実態を把握すること、また、その成果を今後の教育活動に生かすことを目的とし、それに基づいて、調査、研究を行った。

調査目的

本調査の目的は以下のものであった。

- 1 長野県都市部の看護現場においてどのような場合にどのような英語を必要としているかなどの英語の必要性に関する実態を把握し報告する。
- 2 調査、研究の結果を今後の看護教育のための資料として提示し、学生指導に関する提言を行う。

方法

1 調査期間

平成11年10月から12月にかけて実施した。

2 調査対象者

調査対象者は、総合病院の婦長とした。所属機関については、今回は、十分なサンプル数が得られると考えられた、長野県下全市の総合病院とし、県下最大のベッド数を持つ臼田町の佐久総合病院を含めた。したがって、調査対象は、飯山市・長野市・大田市・須坂市・中野市・更埴市・上田市・佐久市・小諸市・松本市・諏訪市・岡谷市・茅野市・駒ヶ根市・飯田市、及び臼田町の総合病院の婦長である。

3 調査方法

調査は、アンケート調査によって行った。調査は匿名であり、回答は統計

的に処理を行うのみであり、回答者に迷惑のかからない旨、アンケート調査の
お願いに記述した。各病院の看護部長、または、総看護婦長に調査票を一括し
て郵送し、各婦長への配付を依頼した。平成11年11月初旬に郵送し、回答
者の郵送にて回収した。発送数295件に対して、それぞれの婦長から211件
の回収を得た（回収率は72%）。

質問の回答は、5～7の選択肢の中から該当するものを2項目選ぶことを主
な方法とし、質問事項に関する経験などの有無を答える二者択一の方法、回答
した項目の具体的内容を記述する方法、及び、英語あるいは看護における英語
教育に関する意見を記述する自由記述の回答方法を加えた。

4 調査内容

調査用紙は以下の項目で構成された。

- (1) 調査対象者の基本属性
 - ・年代
 - ・担当領域
- (2) 英語に関する経験の状況
 - ・英語が必要であった場面
 - ・必要であった英語の種類
- (3) 英語に関する予測状況
 - ・英語が必要となる場面
 - ・必要となる英語の種類
- (4) 外国人患者対応経験の状況
 - ・外国人患者対応経験の有無
 - ・文化的背景の知識の必要性
 - ・コミュニケーション不足の経験の有無

(5) 大卒ナースへの期待の状況

(6) 所属機関の状態

- ・現在の外国人患者の入院状況
- ・過去の外国人患者の入院状況
- ・外国人患者対応の手引書の有無

(7) 同様の調査の回答経験の有無

(8) 英語あるいは看護における英語教育に関する自由記述

結果および考察

1 基本属性

回答者の担当領域を自由記述で記載してもらった結果を、病棟と外来およびその他（分類不明を含む）の3つに分類して集計した。その結果、担当領域は、病棟(入院)が113人(63.0%)であり、外来は11人(5.2%)、その他あるいは分類不明が67人(31.8%)であった。年代別では、40歳代が90人と多く(42.7%)、50歳以上68人(32.2%)、20歳代28人(13.3%)、30歳代25人(11.8%)の順となっていた(表1)。平均年齢は44.9歳、中央値は45.0歳、標準偏差は9.9歳と推定された。

[表1]

2 選択による回答の結果と考察

[表2]

表2に、英語と看護に関する調査結果を領域別、年齢区分別の集計結果と合わせて示す。なお、表中の質問1、2、3、4および8のように、選択肢が3つ以上ある質問については、2つだけを回答するよう依頼している。

「これまで看護現場で英語が必要だったのはどのような場面ですか」という質問に最も回答が多かったのは、外国人の患者と接するときの184人(87%)であった。これに、英語の専門書などを読んで勉強したときの50人(24%)、海外研修の時20人(9%)が続き、必要でなかったという回答はわずか13人(6%)であった。その他の記述内容は、「ドクターの記録を読むとき」が最も多く、「外国人のドクターが来たとき」がこれに続いた。この結果からは、看護の現場においては、外国人の患者と接する機会がありその場での英語の必要性が認識されていること、また、英語の専門書などを読んで勉強する機会が

増えてきていることを示唆しているものと考えられた。

「これまで必要だったのはどのような英語ですか」という質問には、日常的な英会話の164人(78%)が最も多く、以下、看護・治療のための専門的な英会話の115人(55%)、専門用語59人(28%)、基礎的な英語31人(15%)が続き、専門文献などを読むための文法知識、読解という回答も15人(7%)あった。これには、病棟と外来とで違いが見られ、病棟に所属する婦長の回答で最も多かったのが日常的な英会話であったのに対して、外来に所属する婦長の回答で最も多かったは看護・治療のための専門的な英会話であった。この結果により、看護・治療のための専門的な英会話とともに、日常的な英会話の必要性が高いことが認められ、仮に専門的な英会話ができるレベルに達していなくても、日常的な英会話ができれば、看護現場ではかなり有効であることがわかった。

「今後どのような場面で英語が必要になると思いますか」という質問は、外国人の患者と接するときという回答をほぼ全員の208人(98%)が選択し、英語の専門書などを読むときが105人(50%)、海外研修の 때가34人(16%)と続いた。現在の看護現場においても、今後一層外国人患者と接する機会が増え、そのような場面での英語の必要性が予測されていることが確認された。

「今後どのような英語が必要になると思いますか」には、日常的な英会話と答えたものが174人(82%)と最も多かったが、看護・治療のための専門的な英会話も145人(69%)と多かった。専門文献などを読むための文法知識、読解(52人、25%)、専門用語(43人、20%)という回答も比較的多く得られた。これについても前述の「これまで必要だった英語」と同様に、病棟に所属する婦長の回答で最も多かったのが日常的な英会話であったのに対して、外来婦長の回答が最も多かったのが看護・治療のための専門的な英会話であるという違いが見られた。さらに、英語のレベルとして看護・治療のための専門的な英会話と答えた割合は、前述の「これまで必要だった英語」の回答と比べて14%

増えており、これは、基礎的な英語（中学・高校卒業程度）という回答が10%であったことと合わせて、今後の看護の現場においてより高度な英語力が求められるようになってきていることを反映している結果ではないかと考える。

この他、全体の89%（186人）が「今までに、外国人患者の看護、または、対応をしたことがある」と答え、その内の77%（144人）が「外国人患者への対応において、文化的背景を知っておく必要を感じた」と答えた。文化的背景を知っておく必要を感じた項目の記述回答については、食生活が76人(53%)と最も多く、宗教、生活習慣全般がこれに続く結果であった。

また、91%（166人）が「外国人患者とのコミュニケーション不足を感じたことがある」と答えていた。内容の記述回答については、コミュニケーション不足を感じたもののうち、訴えや気持ちを十分理解してやれなかったとの意見が57人(34%)と最も多かった。また、看護者側からもうまく説明ができなかったとの意見も38人(23%)あった。この結果から、ヒアリング、スピーキングともに力不足であることが認められた。その結果、特にコミュニケーションが重要である精神面で満足の行くケアができなかった、あるいは、積極的に接することができなかったと感じ、外国人患者に対する看護活動に充足感が得られていないことが示されていた。また、その原因は自らの英語力不足にあると42人(25%)が述べていた。これらの結果により、文化的背景を知っておく必要を感じなかったと回答した40人（22%）に関しても、コミュニケーション不足により必要性を感じるに至らなかった可能性もあると推察された。

「英語に関することで、大卒ナースに期待することは何ですか」という質問に最も多かった回答は、研究におけるリーダーシップの119人（63%）であり、わずかではあるが、外国人の患者への対応の115人（61%）を上回っていた。この回答には、年齢による差が見られ、20歳代の婦長の約60%が外国人の患者への対応を選択しているのに対して、30歳代以上は研究におけるリーダーシップを最も多く選択していた。英語に関して大卒ナースに期待する外国人の患

者への対応に関しては、コミュニケーションの能力を期待するものであり、また、研究におけるリーダーシップとは、看護研究で必要になる英語、あるいは英語文献の活用などが考えられた。

現在、外国人の患者が入院している病院は、27人(14%)であるが、過去に入院した経験のある病院は、ほぼ全数に近かった(200人、97%)。長野県にも外国人の割合が増加してきており、外国人の患者と接することがきわめて日常的に起こっていることを示す結果と考えられる。また、病院には、外国人の患者に対応するための手引きなどがあると答えたものが144人(71%)であった。マニュアルの種類を聞く質問に対して、78人(54%)が医療用のマニュアルと答えていた。どの程度有効なものであるかは、今回は調査しなかったが、28人(20%)が日常会話集、13人(9%)が単語集と回答し、28人(20%)が簡単なもの、または役に立っていないと説明しており、外国人患者に対応する手引書が質的に十分なものではないことが推察された。

「同様のアンケートに答えたことがありますか。」という質問に対しては、208人(100%)が「ない」と答えており、回答者に対してこれまでに同様の調査は実施されていないことが示された。

3 自由記述による回答の結果と考察(英語・英語教育に関する意見)

英語自体について、あるいは看護における英語教育について、自由記述によって意見を求めた。その結果を項目別にまとめて表3に示す。

[表3]

会話能力に関して最も多くみられたのは、少なくとも日常会話の能力は必要との意見が多く、続いて、看護業務に困らない会話能力が必要との意見であった。英語の専門用語に関しては、医療現場で役立つ実用的な英語が必要との意見が最も多かった。現在の英語能力に関しては、これまでの学習に不足を感じてお

り、看護実践で必要とされる英語能力のレベルには達しておらず、外国人患者に対し満足に行く看護活動ができていないという実情が示された。現在の英語の学習の環境に関しては、不十分と感じており、日常英語を使用するような環境を望む意見とともに、英語教育の必要性に関しては、英語は国際語であるとの考え方も示されていた。この結果から、臨床にいる婦長の多くが、英語能力の不足、それが原因で生じる看護実践中の支障、今後の英語教育の重要性を認識しているものと考えられる。

結語

1 まとめ

本調査結果が示すように、病院などの看護の臨床現場において、英語を必要とする機会は多い。また英語を活用して、看護をアップグレードしたいと思っている者もいるとの報告もある(三次、山上、遠藤、1999)。しかし、今回のアンケート調査から、単に日常英会話のレベルを超え、豊富な英語文献に触れ、自らを研鑽するためのレベルを目指しているナースもいる一方で、現状は日常英会話のレベルにさえ到達しておらず、そのことが原因で外国人患者に対し十分な看護ができないと考えるナースが多い実態が示唆された。看護現場において先ず必要なのは、日常英会話、そして看護に必要な英会話という結果であり、また、今後についても同種の英語の必要性を予測する意見が多かった。また、多数が外国人患者とのコミュニケーション不足を訴えており、現状ではヒアリング、スピーキングともに実用的なレベルではないという結果であった。

2 提言

近年、各県に設置される看護系大学においては、科目としての英語の授業だけでなく英語での講義を行うところも増えてきており、臨床のみならず、看護の分野全体での英語の必要性はさらに高まっている。長野県看護大学においても英語教育に特に力をいれており、それに惹かれて志望する学生もいる(太田、石川、野坂他、1999)。しかし、現在看護業務を行っているナースの教育状況については、自由記述の回答から、回答者がこれまでに受けた英語教育が不十分であったこと、実用的ではなかったことが確認された。教育段階で、看護現場でのニーズに対応すべく、英語の授業時間の検討を含め、外国人患者に十分

な対応のできるより実践的な英会話能力の育成、より円滑な看護実践のための専門用語の習得を目指す内容が求められる。看護教育課程の英語教育においては、少なくとも日常的な英会話が可能レベルには到達することを目標とし、さらに進んで、専門用語の知識を十分に持って、英語を駆使しながら臨床で活躍できるナースの育成を強化することが必要である。

また、英語の堪能なナースが十分に配備されるまでには時間を要することであるので、看護現場での当面の問題軽減のために、各治療機関において、英語に関する院内学習の機会を設けたり、個人学習を奨励したりする、国際交流団体との提携の強化を図り、通訳ボランティアなどの援助がより円滑に行われるようにする、あるいは通訳担当の職員の配置または巡回等行政レベルでの対応を行うなど、現状改善のための何らかの措置が講じられることが望ましいと考えられる。

3 課題

調査の結果から、看護現場では、外国人患者に対し適切な対応が行われていないとの認識が持たれていることが明らかになった。これを踏まえて、上記のような提言を行ったが、どのような措置が現状では最も求められているのかが現段階では把握できていない。現場のニーズを解明する必要があるので、第2次アンケート調査を実施予定である。

文献

太田勝正、石川利江、野坂俊弥他(1999)：看護大学選択の際の学生の判断と迷いについて。長野県看護大学在校生へのアンケート調査より。長野県看護大学紀要、1：65-77。

数字で見る信州。外国人登録者数。(2000、10月8日)：朝日新聞、長野県総合版朝刊：27。

三次智代子、山上みな子、遠藤文栄(2000)：英語で看護をアップグレード。ナースビーンズ、2：942-944

表1 回答者の領域と年齢区分

	20歳代	30歳代	40歳代	50歳以上	
外来	0	1	5	5	11人 5.2%
病棟(入院)	17	13	52	51	113人 63.0%
その他・不明	11	11	33	12	67人 31.8%
	28人 13.3%	25人 11.8%	90人 42.7%	68人 32.2%	211人 100.0%

表2 回答結果（領域および年齢区分別）

質問および回答選択肢	合計(%)	領域			年齢区分			
		外来	病棟	その他 不明	20～	30～	40～	50～
1.これまで看護現場で英語が必要だったのはどのような場面ですか								
1. 外国人の患者と接したとき	184 87%	11	118	55	17	23	80	63
2. 英語の専門書などを読んで勉強したとき	50 24%	1	33	16	6	5	24	15
3. 海外研修の時	20 9%	3	13	4	0	2	11	7
4. その他	33 16%	3	19	11	4	4	15	10
5. 必要ではなかった	13 6%	0	6	7	6	0	6	1
2.これまで必要だったのはどのような英語ですか								
1. 基礎的な英語（中学・高校卒業程度）	31 15%	1	20	10	4	6	13	8
2. 日常的な英会話	164 78%	7	107	51	17	17	76	54
3. 看護・治療のための専門的な英会話	115 55%	10	81	25	13	14	46	42
4. 専門用語	59 28%	2	38	19	11	13	23	12
5. 専門文献など読むための文法知識・読解力	15 7%	1	10	4	2	0	6	7
6. その他	2 1%	0	0	0	0	0	2	0
7. 必要ではなかった	8 4%	0	3	5	5	0	2	1
3.今後どのような場面で英語が必要になると思いますか								
1. 外国人の患者と接するとき	208 98%	11	131	66	28	24	88	67
2. 英語の専門書などを読んで勉強するとき	105 50%	6	72	27	11	12	50	33
3. 海外研修の時	34 16%	1	25	8	1	5	14	14
4. その他	7 3%	0	5	2	1	0	5	1
5. 必要ではない	0 0%	0	0	0	0	0	0	0
4.今後どのような英語が必要になると思いますか								
1. 基礎的な英語（中学・高校卒業程度）	22 10%	2	12	8	1	4	10	7
2. 日常的な英会話	174 82%	7	110	57	25	21	75	52
3. 看護・治療のための専門的な英会話	145 69%	8	100	37	21	14	57	53
4. 専門用語	43 20%	1	22	20	8	9	17	9
5. 専門文献など読むための文法知識・読解力	52 25%	3	37	12	2	4	25	20
6. その他	1 0%	0	0	1	0	0	1	0
7. 必要ではない	0 0%	0	0	0	0	0	0	0
5.今までに、外国人患者の看護、または、対応をしたことがありますか								
はい	186 89%	11	121	54	18	24	78	65
いいえ	23 11%	0	11	12	10	1	9	3
6.外国人患者への対応において、文化的背景を知っておく必要を感じたか								
はい	144 77%	8	97	39	12	17	65	50
いいえ	40 22%	3	20	17	5	6	14	14
7.外国人患者とのコミュニケーション不足を感じたことがありますか								
はい	166 91%	10	110	46	15	22	70	58
いいえ	16 9%	1	7	8	3	1	6	6
8.英語に関することで、大卒ナースに期待することは何ですか								
1. 外国人の患者への対応	115 61%	4	79	32	23	13	42	37
2. 研究におけるリーダーシップ	119 63%	5	78	36	7	17	52	42
3. 諸外国の文化的背景などの広い知識	61 32%	3	42	16	9	5	25	21
4. その他	6 3%	1	4	1	0	1	3	2
9.現在外国人の患者が入院していますか								
はい	27 14%	3	15	9	6	5	8	8
いいえ	169 86%	7	110	53	22	18	76	53
10.過去外国人の患者が入院していたことがありますか								
はい	200 97%	11	126	63	27	24	82	66
いいえ	7 3%	0	3	4	1	0	4	2
11.病院には、外国人の患者に対応するための手引きなどがありますか								
ある	144 71%	10	94	40	10	17	65	51
ない	60 29%	0	34	26	17	7	20	16
12.同様のアンケートに答えたことがありますか								
はい	1 0%	0	1	0	0	0	0	1
いいえ	208 100%	11	131	66	28	25	88	66

表3 英語あるいは看護における英語教育への意見と件数

意見	件数
会話能力	
1. 日常会話は必要と思う	28
2. 専門学校でも処置，治療を行うときの英会話を積極的に取り入れて欲しい	14
3. 英語についての勉強は中，高，看護学校と授業は受けましたが，自分のものになっていません。会話能力もとても不足しています	9
4. 通訳を介することなく日常会話，訴えに関する事等できれば患者の不安も解消できると思う	3
5. 日本人も2ヵ国語は話せるようになるとよい。	1
英語の専門用語	
1. 病棟で使用できる日常会話（医療用語含めて）など，入院時データベースを記入できる程度の語学力が必要	1
2. 英語による会話，不十分なため，通訳を一般人に依頼しても専門的な言葉がうまく伝えられず，困ったことがあった。看護や治療に関する英語の知識の必要性を痛感した	1
3. 医療の現場で使える基礎的な英語は身につけるべき。基礎的というと，解剖，病名，病状症状は英語で知っておく必要あり	9
4. 看護学校の英語教育も高校の延長のようだったが，もう少し医学や看護に関する語句などやって欲しい	5
5. 一般教養としてだけでなく，英語の文献を読むことも学びたい	5
現在の学習の場	
1. 通信教育で医学英語を学んでいましたが，日頃使っていないと忘れてしまい，いざ患者さんが入院しても活用できない現状です。学べる場所や講師さんがいて下されば学びたい	6
2. 看護の場面のヒアリングのテープまたはビデオがあると良いと思います	1
3. 身近に英語文献があれば，勉強すると思いますが	1
4. 看護用語の中に英語をどんどん使う習慣がないので，教育と実生活とが分離している	1
英語教育の必要性	
1. 現在の教育のシステムは分かりませんが，以前は英語教育には力を入れていなかった。国際化の時代となり，必要だと感じる	6
2. 看護教育の中に，英語，国際的文化などの知識は今後必要だと思います	5

アンケート調査のお願い

ここ数年、全国で看護大学あるいは看護学部が開設され、看護においても大学教育が重要視されるようになりました。長野県でも、平成 7 年に長野県看護大学が開学しました。長野県看護大学では、開学当初より、国際化社会に対応する看護教育に関連するものとして、外国語教育、特に英語教育にも、力を入れて参りました。そこで、本学での英語教育の指針、また、今後の看護教育への提言の資料とするために、長野県の看護現場における英語の必要性に関する調査を行うことになりました。つきましては、現場で働く看護職の皆さんがどのような面で英語を必要としているか、ぜひお聞かせくださいますようお願い申し上げます。看護学生の教育の向上のために、ご協力ください。

お聞かせいただいた内容は、名前を伏せ、統計的に処理いたします。ご迷惑の掛かることはありません。ご回答の上、お手数ですが、同封の封筒に入れ、10月末日までにご返送ください。

ご不明な点などは、下記までお問い合わせください。

問い合わせ先

長野県看護大学英語担当

西垣内磨留美

電話：0265-81-5141

田中建彦

電話：0265-81-5139

[アンケート調査用紙]

*記入の仕方：該当する番号や文字に○をお付けください。
(複数該当する場合は、上位二つの番号にお願いします。)
() 内には具体的にご記入ください。

0 あなたご自身についてお聞かせください。

担当領域 ()
年齢 20代 30代 40代 50代 60代以上

1 これまで看護現場で英語が必要だったのはどのような場面ですか。

1. 外国人の患者と接したとき
2. 英語の専門書などを読んで勉強したとき
3. 海外研修の時
4. その他 ()
5. 必要ではなかった

2 これまで必要だったのはどのような英語ですか。

1. 基礎的な英語 (中学・高校卒業程度)
2. 日常的な英会話
3. 看護・治療のための専門的な英会話
4. 専門用語
5. 専門文献など読むための文法知識・読解力
6. その他 ()
7. 必要ではなかった

3 今後どのような場面で英語が必要になるとお思いますか。

1. 外国人の患者と接するとき
2. 英語の専門書などを読んで勉強するとき
3. 海外研修の時
4. その他 ()
5. 必要ではない

4 今後どのような英語が必要になるとお思いますか。

1. 基礎的な英語 (中学・高校卒業程度)
2. 日常的な英会話
3. 看護・治療のための専門的な英会話
4. 専門用語
5. 専門文献など読むための文法知識・読解力
6. その他 ()
7. 必要ではない

5 今までに、外国人患者の看護、または、対応をしたことがありますか。

はい

いいえ

はいと答えた方は6へ、いいえの方は8へお進みください。

6 外国人患者への対応において、文化的背景を知っておく必要を感じたことがありますか。(宗教、食生活など)

はい

それはどのようなことですか。

()

いいえ

7 外国人患者とのコミュニケーション不足を感じたことがありますか。

はい

それはどのようなことですか。

()

いいえ

8 英語に関することで、大卒ナースに期待することは何ですか。

1. 外国人の患者への対応
2. 研究におけるリーダーシップ
3. 諸外国の文化的背景などの広い知識
4. その他 ()

□ 9 現在外国人の患者が入院していますか。

はい () 人くらい

いいえ

10 過去外国人の患者が入院していたことがありますか。

はい

いいえ

11 あなたの病院では、外国人の患者に対応するための手引きなどがありますか。

ある

それはどのようなものですか。

()

ない

12 同様のアンケートに答えたことがありますか。

はい

いいえ

13 英語について、あるいは看護の分野での英語教育についてご意見・ご要望などありましたらお書きください。

14 他の看護婦／士さんのご意見・ご要望などありましたらお書きください。

ご協力ありがとうございました。

協力病院リスト

長野赤十字病院
厚生連篠ノ井総合病院
厚生連松代総合病院
長野市民病院
長野中央病院
県立須坂病院
厚生連北信総合病院
更埴中央病院
市立大町総合病院
飯山赤十字病院
佐久市立国保浅間総合病院
JA 長野厚生連佐久総合病院
厚生連小諸厚生総合病院
国立東信病院
信州大学医学部付属病院
松本協立病院
国立松本病院
市立岡谷病院
諏訪赤十字病院
組合立諏訪中央病院
伊郡市営伊郡中央総合病院
昭和伊南総合病院
飯田市立病院

長野県都市部の看護現場における 英語の必要性に関する研究

研究代表者

西垣内磨留美

研究分担者

田中建彦, 山田幸宏, 太田勝正

調査目的

- 看護現場における英語の必要性の
実態の把握
- 学生指導に関する提言

調査方法

■調査対象者

- ◆長野県下全市の総合病院
臼田町の佐久総合病院の婦長

■調査方法

- ◆アンケート調査を郵送
211件の回答（回収率72%）

主な結果（1）

- 1.英語が必要であった場面
外国人の患者と接するとき（87%）
- 2.必要であった英語の種類
日常的な英会話（78%）
- 3.英語が必要となる場面
外国人の患者と接するとき（98%）
- 4.必要となる英語の種類
日常的な英会話（82%）

主な結果 (2)

5.外国人患者対応経験の有無

ある 89%

→ 6.文化的背景の知識の必要性
必要 77%

→ 7.コミュニケーション不足の経験の有無
ある 91%

8.大卒ナースへの期待の状況

研究におけるリーダーシップ (63%)

外国人の患者への対応 (61%)

主な結果 (3)

9.外国人患者の入院状況

現在、入院中 (14%)

過去、入院したことがある (97%)

10.外国人患者対応の手引書の有無

ある (71%)

主な結果（4）

11.英語・看護英語教育に関する自由記述

- ・会話能力

 - 少なくとも日.常会話の能力は必要

- ・現在の英語能力

 - 必要な英語能力のレベルではない

- ・受けた英語教育

 - 不十分

 - 実用的でない

結語

- 長野県内に約4万人の外国人（1999現在）

 - ◆ブラジル、中国、韓国、朝鮮籍が多い

 - ◆日常語は英語ではないが、医療現場等では英語によるコミュニケーションも

- 臨床看護現場で英語を必要とする機会は多い

 - ◆様々なレベルの英語が求められている

- まず、日常英会話、そして看護に必要な英会話の必要性

- 英語を駆使しながら、臨床で活躍できるナースの育成

[英文要約]

(「長野県都市部の看護現場における英語の必要性に関する調査」
長野県看護大学紀要第3巻)

This is a report of the research concerning the need for English skills in the nursing practice in the cities of Nagano prefecture, which gives an outline of the research and the principal results of the survey with the questionnaire. The ultimate purpose of the research is to examine what kind of English in what case the nursing practice needs and to supply data for the future education in nursing. The method is the questionnaire survey, which was conducted on the head nurses at the general hospitals in the 17 cities of Nagano prefecture. Major findings of this survey are as follows: Most nurses feel the need for English skills, mainly in everyday English conversation, chiefly when they attend to the nonnative patients. They expect graduate nurses to display leadership in the research and to attend to nonnative patients. Most of the respondents have experiences of nursing care or attended to nonnative patients, and they feel the need for knowing the cultural background of nonnative patients and find it difficult to come to a mutual understanding. Most hospitals have had nonnative inpatients, although not many in the present. The hospitals where all in outpatients' department and about 70% in inpatients' ward of the respondents have the manuals, which they can read when they attend to nonnative patients. Many nurses who have experience of care or attended to nonnative patients feel the occupational need for English skills in practice nursing. Nursing practice calls for the nurses who have basic English skills. English education in nursing educational curriculum is necessary for the nurture of nurses who play conspicuous parts in clinical settings with full use of English.

謝辞

多大なご協力を賜りました各総合病院の看護部長、及び、総看護婦長の皆さま、ならびに、丁寧にご回答いただきました婦長の皆さまに、深謝申し上げます。

また、本報告書の作成にあたり、ご指導いただいた長野県看護大学心理学助教授石川利恵先生に心より感謝申し上げます。